202305KeMCo

View Report

Campaign Preview　HTML Source　Plain-Text Email　Details

View this email in your browser

KeMCo

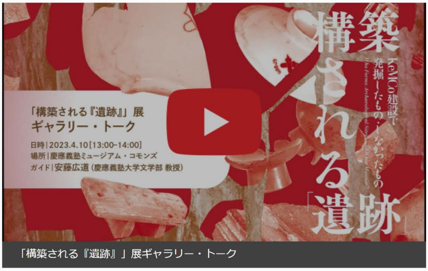
4月27日をもって、「構築される『遺跡』：KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの」が閉幕致しました。民族学考古学研究室のお力をお借りして作り上げた、発掘や考古学への熱い思いがあふれる展覧会となりました。
展覧会を見に行った気分になれる？レポートも、ニュースメール内で紹介いたします。

KeMCoの近況

「構築される『遺跡』：KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの」が閉幕しました

「構築される『遺跡』：KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの」は、4月27日（木）をもって好評のうちに閉幕致しました。
本展覧会では、「対話」を大切にしました。展示の感想や疑問などを展示室で貸し出している「野帳」に書きつけていただき、それに展示企画チームが答える…というまるで交換日記のような企画「構築される問いの採集」には、想定を超える数の声が寄せていただきました。また、資料解説には担当者のサインを記すことによって、「その人と話しているみたい」という感想もいただきました。これまでの考古学の展覧会とは趣向の異なる、KeMCoらしい展覧会となったのではないでしょうか。
ご来場いただいた皆様には厚くお礼を申し上げます。

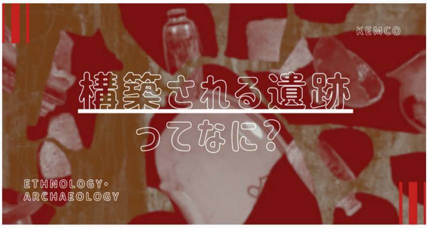
ギャラリートークのアーカイヴ動画を公開中です。以下よりぜひご覧ください。


構築される「遺跡」
KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの
「構築される『遺跡』」展
ギャラリー・トーク
日時|2023.4.10[13:00-14:00]
場所|慶應義塾ミュージアム・コモンズ
ガイド|安藤広道（慶應義塾大学文学部 教授）

「構築される『遺跡』」展ギャラリー・トーク

---

note「構築される遺跡ってなに」vol.1～4　公開中



「構築される『遺跡』：KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの」の展覧会レポートを、KeMiCoのNoekaが執筆しました。
民族学考古学研究室の学生でもあるNoekaならではの視点で、展覧会についてレポートしています。Vol.1～4まである大ボリュームで、展覧会に行った気分に浸れるレポートです。ぜひご一読ください。

note「構築される遺跡ってなに」（note top）

【開催レポート】「考古学と現代美術をめぐるミニトーク　安藤広道（慶應義塾大学文学部教授）×山田健二（美術家）」

2023年4月14日（金）、展覧会関連イベントとして、「考古学と現代美術をめぐるミニトーク　安藤広道（慶應義塾大学文学部教授）×山田健二（美術家）」を開催しました。
　遺跡とは「土の中にあり、見えてはいないがあらかじめそこに存在はしているもの」であり、考古学者が発掘調査を行って過去の痕跡があらわになり、遺跡と呼ばれるようになっていくというのが一般的なイメージです。しかし実際は、土の中には生き物（の痕跡）や、何万年もの地質や地形などありとあらゆる情報が含まれています。発掘調査とは、過去の痕跡を考古学者が調査し、人間の営みに関する遺物として保存していくべきものを選択していく行為であり、遺跡とはそこでなされる選択によって作られていくという側面があるのではないか、と安藤氏は始めに語りました。今回の展覧会は「選ばれたもの」と同時に生じる「選択から漏れたもの」にも光を当てる、ある意味野心的な展示として歴史構築における問題提起となるよう構想された点を、企画者の立場からお話しされました。
　山田氏の作品「Mita Intercept_」は、学生や市民が発掘された遺物と自身の関係を位置づけ共有してみるワークショップから派生したパフォーマンスを3D映像化し、仮想のKeMCo地下空間および2019年当時の発掘現場を舞台とする映像作品を核としたインスタレーションとして展開しています。安藤氏はこの作品を初めて見たとき、参加者それぞれの知識や経験、感性が遺物に結びつき広がっていく過程が面白く、このような広がりを学術で拾いあげることができたら、学術の側にも色々な形で還元されるのでは…と思ったと

言います。山田氏は、「学術的な正しさ」だけでは扱えないことを詩学や文学でなら扱えるのか？と問いながら本作品を制作したと振り返り、安藤先生の言葉には驚くとともに、あらためて作品を制作した意義を感じたと語りました。

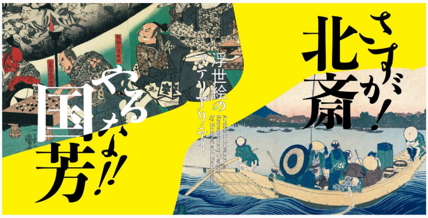
　学術的な正しさを追求していくことは必要である一方で「正しいのだから信じなさい」という想像を挟ませない世界は寂しいものである、「Mita Intercept_」の参加者は資料を通して過去と真摯に向き合っており、この真摯さを学術の側も受け取り真剣に対話していくことが求められていると安藤氏は語ります。

　お二人の対話は時間いっぱいまで続き、「考古学×現代美術」の新しい可能性と広がりを期待させるお話となりました。

構築される「遺跡」
KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの
「構築される『遺跡』」展
考古学と現代美術をめぐるミニト
安藤広道（慶應義塾大学文学部 教授）× 山田健二
日時｜2023.4.14［19:00-20:30］
会場｜慶應義塾大学 三田キャンパス G-Lab（東館 6 階）

「構築される『遺跡』」展関連イベント｜考古学と現代美術をめぐるミニトーク

【5月15日から】「さすが！北斎、やるな！！国芳」－浮世絵のマテリアリティ


さすが！北斎
やるな!!国芳
浮世絵のマテリアリティ

葛飾北斎と歌川国芳。教科書にもその名が掲載される二人の浮世絵師だが、19世紀、最幕末の江戸に生きた彼らには確かな接点があった。

北斎は、勝川春章率いる勝川派で修業したのちに独立し、多様な絵画様式を旺盛に吸収することで、のちに葛飾派（北斎派）と呼ばれる一大絵師集団を作り上げた。他方の国芳は、北斎の師春章と同時代のライバル絵師歌川豊春の孫弟子で、その師豊国や同じ派閥の広重はいずれも、北斎の好敵手であった。ところが所伝によれば、国芳本人は先達として北斎を慕って近づいたともされ、逆に北斎が彼の師系への配慮から親密な関係を拒んだとも伝えるほどである。

本展覧会は、慶應義塾が所蔵する高橋誠一郎浮世絵コレクションのなかから、互いに他とは一線を画するエキセントリックな表現で人気を博した二人の浮世絵師、北斎と国芳の魅力を再確認する機会としたい。あわせて、展覧会で初紹介される新出の絵師たちによる下絵群からは、彼らの生き生きとした筆さばきを十分にご堪能いただけるものと思われる。

「さすが！北斎」「やるな！！国芳」とは、今回ご覧に入れる手練れの絵師たちの作品をみて、思わず漏れてしまう自然な声ではないだろうか。理屈抜きで、まずはお楽しみあれ！

「さすが！北斎、やるな！！国芳」－浮世絵のマテリアリティ

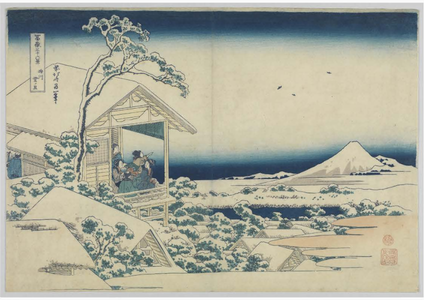
前期｜2023年5月15日（月）～6月13日（火）
後期｜2023年6月15日（木）～7月15日（土）
特別開館｜5月20日（土）、6月17日（土）、7月15日（土）
臨時休館｜5月22日（月）、6月14日（水）、7月3日（月）
開館時間｜11:00～18:00（土日休館）
会場｜慶應義塾ミュージアム・コモンズ展示室（三田キャンパス東別館）
対象｜どなたでもご覧いただけます
費用｜無料（事前予約不要）
主催｜慶應義塾ミュージアム・コモンズ（KeMCo）、慶應義塾大学三田メディアセンター
助成｜公益財団法人　花王 芸術・科学財団

「さすが！北斎、やるな！！国芳」－浮世絵のマテリアリティ

展示室より、推しモノ #18

5月15日より開催する「『さすが！北斎、やるな！！国芳』－浮世絵のマテリアリティ」

より、一作品を紹介します。



葛飾北斎（画）、「富嶽三十六景 礫川雪ノ旦」、19世紀前期、大判錦絵

「冬はつとめて」。早朝の澄んだ空気のなか、鮮明に見える冬の景色を称えた清少納言による有名な一節である。この言葉は、北斎の作品にも当てはまる。

私の「推し」の一品は、「冨嶽三十六景　礫川雪ノ且（こいしかわゆきのあした）」である。「礫川」とは小石川を指し、現在の後楽園駅付近にあたる。本作は後楽園駅より徒歩10分ほどの牛天神北野神社から、冬の富士を眺める茶屋の客たちを描いた一図で、「冨嶽三十六景」シリーズのなかで唯一、白銀の世界を舞台とする。なお題名には「且」とあるが、正しくは「旦」とすべきで、恐らく彫師による誤りだろう。

この作品を「推し」たい理由は、他でもない私の実体験による。冬の通勤時、駅へと歩くなか、私の住む地域では橋の上から西を眺めると、往々にして遠方の富士がくっきりと見えることがある。まさに北斎の作と同じ状況だ。そんな親近感をおぼえる作を、ここで挙げてみた次第である。

宮﨑 黎（KeMiCo）

空き地

学生学芸スタッフ(KeMiCo)の畑中乃咲佳です。民族学考古学研究室に所属しており、KeMCoではSNSの運営に携わっています。この度民族学考古学研究室の生徒としても関わる機会を賜った展覧会「構築される『遺跡』：KeMCo建設で発掘したもの・しなかったもの」が無事閉幕いたしました。私はセクション３の弥生～古墳時代のエリアを主に担当したのですが、ものを選択し、並べる/展示するという行為によって発生する新たな文脈や価値観をどう活かすか、またどう取り除くかということを考えるのが非常に難しかったです。展示期間中も、皆様からの感想を募集する「問いの採集」やワークショップの開催など、私たち学生が主導となって動く機会をいただき、多くの学びが得られました。撤収作業が終わった空っぽの展示室は非常に寂しかったですが、同時に次回展がとても楽しみです。展示ごとに雰囲気が大きく変わるのがKeMCoの楽しいところだと思うので、また多くの方にご来場いただけると嬉しいです。

畑中 乃咲佳（KeMiCo）

お知らせ

三田でご覧いただける展示

福沢諭吉記念 慶應義塾史展示館（現在は常設展示室のみ）
開館時間｜10:00～18:00
会場｜福沢諭吉記念 慶應義塾史展示館

「EU諸国の貿易情報　～各国のミニ情報に触れてみよう～」
3月17日（金）**-5月31日（水）**
企画｜慶應義塾大学EU情報センター
会場｜慶應義塾大学三田メディアセンター

「第358回企画展示：春のこゑ―蔵書で愛でる花と鳥―リバイバル展」
4月12日（水）**-5月27日（土）**
主催｜三田メディアセンター展示委員会
会場｜慶應義塾大学三田メディアセンター

「アート・アーカイヴ資料展XXV「歌舞伎への情熱――田邊コレクション／『役者』関係資料展」
5月22日（月）–7月28日（金）
主催｜慶應義塾大学アート・センター
会場｜慶應義塾大学アート・スペース

KeMCo Voiceでは皆様のご意見・ご感想を募集しております

KeMCo Voiceやミュージアム・コモンズへご意見・ご感想がございましたら、以下のアドレスまでお寄せいただければ幸いです。
いただきましたご意見は匿名でご紹介させていただく場合がございます。紹介をご希望で

ない場合はその旨をお書き添え下さい。

> ご意見・ご感想はこちら

次回の*KeMCo Voice*は*2023*年*6*月に配信予定です。
過去のニュースメールはこちら

Copyright © 2019-2023 慶應義塾ミュージアム・コモンズ　*Keio Museum Commons*

〒108-8345　東京都港区三田2-15-45

Tel:　03-5427-2021　Fax:　03-5427-2022
お問い合わせ

KeMCo Voiceの配信停止をご希望の方はこちら